

【文書 09】

「釈尊伝の研究」を通して見えてきたブツダの真実
――釈尊教団は存在したか――

森 章司（東洋大学名誉教授）

本稿は2010年5月8日（土）に、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて行われた、日本テラワダ仏教協会主催の「大ウェーサーカ祭」の記念講演として行った講演原稿を、同協会の許しを受けてアップしたものである。

なお番号のついた「小見出し」のような形になっているものは、講演の際にスクリーンに映写するために作成したパワー・ポイントのための原稿である。

(1) 「釈尊伝の研究」を通して見えてきたブツダの真実

――釈尊教団は存在したか――

森 章司（東洋大学名誉教授）

*背景にアジャンター第26窟仏涅槃像の写真

ご紹介いただきました森でございます。よろしくお願いたします。

本日は今スクリーンに映っておりますように、「『釈尊伝の研究』を通して見えてきたブツダの真実――釈尊教団は存在したか――」というテーマでお話させていただきたいと思います。実はこの「釈尊伝の研究」というのは、「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」という具体的な研究を指しています。この研究の成果はインターネット上に公開しております、この写真はそのトップページに掲げてあるものでございます。

ここには

お釈迦さまはどのような方だったか

お釈迦さまのサンガはどのようなものだったか

仏弟子たちはどのような活動をしていたか

お釈迦さまたちはどのような生活をされていたか

という文章が書き込んでありますが、これがこの研究の目指しているところを簡単に表したものです。これをもっと縮めていいますと、単にお釈迦さまの生涯の事績を時系列にしたがって並べるだけでなく、体温の感じられるような、生き生きとしたお釈迦さまの姿を描いてみたいということでございます。

(2) 「モノグラフ」第16号の写真

この写真は、この1月に出しました第16冊目の「研究報告書」でありまして、発行所が「中央学術研究所」となっておりますが、これはこの研究を援助して下さっている研究所の名前でございます。

ちょっと読みとりにくいと思いますが、この報告書に掲載しました論文は、「サンガにおける紛争解決の調停と犯罪裁判」という論文と、「紛争解決法としての多数決とその理念」という論文と、「原始仏教聖典などに見る就学・結婚などの平均年齢」という3つの論文でありまして、お釈迦さまと仏弟子たちの生き生きとした活動状況を知るための具体的な研究テーマはこのような細部にまで及んでいるわけでござ

います。

この研究は平成4年（1992年）に数人の研究者に手伝っていただいて始めたものでありまして、もうやがて20年になろうとしております。42.195キロのマラソンに譬えますと、今はいちばん苦しいといわれる30キロから35キロを越えたところではないかと思えます。その過程におきまして、スマナサーラ長老にもお出まし頂きまして、シンポジウムを催したこともございます。したがってまだ終了したわけではないのですが、今日はこの20年になんなんとする研究で分かってきたことの一端をお話させていただきたいということでございます。

(3) お釈迦さまの誕生・成道・般涅槃の日

テーラワーダ仏教

ヴェーサーカ月の満月の日

日本仏教

仏生会（灌仏会 花祭り）＝4月8日

成道会＝12月8日

涅槃会＝2月15日

ところで今日は、ヴェーサーカ祭の行事でございますので、本題に入ります前に、お釈迦さまの誕生日と、成道日、般涅槃の日にちについて少しばかりお話をさせていただきたいと思えます。

と申しますのは、テーラワーダ仏教では、お釈迦さまの誕生・成道・入滅はともにヴェーサーカ月の満月の日ということになっておりまして、ヴェーサーカ月は今の暦で5月頃に相当しますので、今ごろにお祝いをするわけでございます。

ところが日本仏教ではスクリーンに出しましたように、誕生日は4月8日、成道日は12月8日、涅槃日は2月15日ということになっておりまして、誕生・成道・入滅は別の日になっております。

もちろんこれは中国に伝わった伝承をもとにしているわけでございますが、簡単に結論のみを申し上げますと、もともとは中国の伝承でも、お釈迦さまの誕生・成道・入滅の日には同じ日でありまして、しかもヴェーサーカ月ということですから、テーラワーダ仏教の伝承となんら違いがありませんでした。

ところがインドの伝統的な暦では1年を何の月から始めるかということで異なった伝承がありまして、1年はチャイトラ月の白分（新月の翌日から満月まで）から始まるとインド政府が決めたのは1957年のことです。まだ最近のことです。それまではてんでんばらばらな暦を使っていたわけです。かてて加えて中国では時代によってさまざまな暦が使われておりまして、王朝が変わるとその権威を誇示するために暦を変えたといわれるほどでありますから、時代によってヴェーサーカ月を何月と翻訳するかということで違いができてしまったというわけでございます。

しかしだからといって、本来はすべて同じ日にお祝いを行うべきなのに、違う日に行うことになったというのはおかしいのですが、お祭りの多い方がお寺に来ていただく機会が多くなるという深慮遠謀があるのかも知れません。要するにさまざまな伝承をつまみ食いして使っているということになります。ただしテーラワーダ仏教の伝承ではヴェーサーカ月の満月の日、すなわち15日とするわけですが、中国の伝承では8日とするところに違いがあります。なぜこのような違いが生じたのかはわかりません。ただし中国には伝承の中の1つとして、不思議なことに般涅槃だけは15日とする伝承もありますので、涅槃会を2月15日とするのは、それをつまみ食したわけです。

ちなみにお釈迦さまは80歳で入滅されたとされています。これは数え年齢で数えた80歳か、満年齢で数えた80歳かご存知でしょうか。実はこれは満年齢です。中国古代には年齢を満で数えるという習慣はあ

りませんでした。インドにはこの習慣があったのです（数え年齢も行われていました）。しかしこの80歳と数えた誕生日はヴェーサーカ月ではなくアーサールハという月の満月の日です。アーサールハ月の満月の日というのは、お釈迦さまがお母様のマハーマーヤーのお腹の中に入られた時であります。お釈迦さまも菩提樹下で成道されるまでは、生まれ変わり、死に変わりされていたわけでありまして、前の世に死んで今の世に生まれ変わるのには、母親のお腹の中に生まれるという形になるのですから、今世の始まりは受胎の時ということになるわけです。

お釈迦さまの正確な伝記を書くためには、このように誕生日が何時で、年齢の数え方はどうであったかということは基礎的な知識になりますので、このような研究もいたしました。本日はウェーサーカのお祭りということにちなんで、参考のために申し上げさせていただきました。

ということでお話させていただきたいことはたくさんあるのですが、今日はあまり一般には知られていない、また知られているとしても誤解の多い、「サンガ」についてお話をさせていただくことにしました。

(4) サンガ

『広辞苑』

そうぎゃ【僧伽】：[仏]（梵語 saṃgha 和合衆・衆と訳）仏教の修行者の集まり。仏教の教団。

『岩波 仏教辞典』

僧伽 そうぎゃ：サンスクリット語 saṃgha に相当する音写。〈衆〉〈和合衆〉と漢訳。原義は集団・集会。……これが仏教に採用されて修行者の集まり、教団の称とされた。

スクリーンには『広辞苑』と『岩波仏教辞典』の、サンガの音写語である「僧伽」の解説を紹介させていただきました。この解説の執筆者がどのような具体的なイメージをもってこのように解説しているかわかりませんが、これによるとサンガには、5人とか10人とかの修行者たちからなる「集団」という意味と、すべての修行者を統合した組織体である「教団」という意味の、2つの意味があると理解されているとあってよいのではないかと思います。

前者の修行者の集団は、1つのお寺で共同生活しているお坊さんたちの集団を想像すればよろしいでしょう。そしてもう1つの「教団」はバチカンを本部とするカトリック教団のようなものを想像すると分かりやすいと思います。

今ここでは前者を仮に「仏弟子たちのサンガ」とよび、後者を「釈尊教団」とよぶことにしたいと思います。

(5) カトリック教団の組織

ローマ教皇

└─ 全世界で2,500 教区（日本は16 教区 東京・大阪・長崎は大教区）

└─ 責任者は司教（大司教）

└─ 小教区＝教会（日本は796 *2008年）

└─ 責任者は司祭（神父）

カトリックの教会組織は、スクリーンに映したようになっていきます。下のほうからいいますと、2008年の統計では日本には796の教会があるそうです。これを「小教区」といって、その責任者は司祭です。一般には神父さんとよばれています。

そしてこの「小教区」を統括するのが「教区」でありまして、日本には16の教区があるそうです。歴史

とか規模などで一部の教区は大教区とよばれまして、その責任者は司教もしくは大司教です。この教区は全世界で2,500くらいあるそうでございます、そのすべてを統括するのは「ローマ教皇」です。

日本では宗教法人として法人格を持っているのは教区でありまして、1つ1つの教会は法人格を持っておりません。したがって日常的な教会の管理・運営は教区の司教が行うこととなりますが、しかしこれはローマ教皇から委任をされているわけでありまして、聖職者の任免や、神父さんの勤務地の移動や、教会財産の取得や処分、あるいは教会の設置や廃止のような重大な意思決定の権限はローマ教皇にあるわけでございます。中央集権的に上下関係がきちんと整備されたピラミッド型の秩序や組織をヒエラルヒーといいますが、このヒエラルヒーということばは、もともとはこの教会組織をさすことばでした。

このようにカトリックの場合は、整然と目に見える形で教団というものが存在し、その具体的な姿がバチカンであるわけです。

しかし仏教にはバチカンに相当するようなものはありません。仏教に世界の総本山というものがあるなどということも聞いたことはありません。それでは『広辞苑』や『岩波仏教辞典』がいう「教団」はどのようなものをイメージしているのでしょうか。

(6) 現前僧伽と四方僧伽

『仏教大辞典』小学館：(サンガの項)……出家者である比丘の集団(4人以上)を比丘サンガといい、比丘尼の集団を比丘尼サンガといて、これらがそれぞれ共同生活を営んでいた。これを**現前サンガ**という。これに対してサンガのすべてを**観念的に**1つの集団としてとらえたものを**四方サンガ**という。

今スクリーンに出しましたのは、小学館から発行された『仏教大辞典』の(サンガ)の項の解説です。ここには、

「……出家者である比丘の集団(4人以上)を比丘サンガといい、比丘尼の集団を比丘尼サンガといて、これらがそれぞれ共同生活を営んでいた。これを**現前サンガ**という。これに対してサンガのすべてを**観念的に**1つの集団としてとらえたものを**四方サンガ**という。」

と解説しております。仏教学の世界にもやはり廃りがありまして、1つの新説が立てられてこれが一世を風靡したかと思うと、やがてそれが否定されていくということがございます。これは学問としては当然のことでしょう。

今スクリーンに出しました「現前サンガ」ということばや、「四方サンガ」ということばもその1つではないかと思えます。ともかくこのことばは、現時点ではスクリーンに出しましたように理解されていますが、しかしこれは誤りであり、やがてこのような解説は消えていくと思えます。

辞書に書いてあることをはっきりと間違っていると申し上げると支障があるのではないかと心配してくださる方もいらっしゃるかも知れませんが、それは大丈夫です。なぜならこれは私が書いた解説文で、それを書いた本人が間違いだといっているのですから、苦情がでる心配はありません。この辞典が出版されましたのは1988年のことで、「釈尊伝の研究」を始める4年前のことになります。したがって当時の私は学界の常識にしがって執筆したわけですが、この研究をやっている過程で、これが誤りであると気がついたわけでございます。

なぜこれが誤りであるかという理由を申し上げると、少なくとも1時間はかかりますから、今ここでは細かなことは申し上げません。しかし今の解説に書かれているような意味の「現前サンガ」という概念や、「四方サンガ」という概念は存在しない、ということだけは申し上げておきます。

ただこの解説の「四方サンガ」のところで「四方サンガ」は**観念的なもの**だということばは注目していただきたいと思えます。現在の日本の仏教学界では、これが「教団」に相当すると考えられているといっ

てよいでしょう。しかし本来「サンガ」というのは「組織的な集団」を意味しますから、「観念的」にしか存在しないなら「教団」は存在しないというべきでしょう。

仏教聖典は三蔵と呼ばれますが、その中の1つに律蔵、パーリ語ではヴィナヤというものがあります。この中にはサンガの運営法が規則として定められています。しかしこのサンガは出家修行者としての5人とか10人の集団としてサンガ、ここでいう「仏弟子たちのサンガ」を指しておりまして「釈尊教団」をさすものではありません。

また経蔵にも「サンガ」ということばはたくさん出てきますが、そのすべては「仏弟子たちのサンガ」を指しているといつてよいでしょう。要するに三蔵の中には、「釈尊教団」なるものが存在したことを示す直接証拠は見いだせないといつてよいと思います。

しかし実はごくわずかですが、それが「釈尊教団」を意味するのではないかと推測できるようなサンガの用法が見いだされます。

(7) 阿難尊者（アーナンダ）とお釈迦さまの問答

「世尊が比丘サンガに関して何かを語られない間は般涅槃されることはないだろうと考えて、心安らかになりました」

「阿難よ、比丘サンガは私に何を期待しているのか」

提婆達多（デーヴァダッタ）とお釈迦さまの問答

「世尊は歳をとられました。比丘サンガを自分に付嘱してください、自分がブッダとなって比丘サンガを指導しましょう」

「舍利弗・目連にすら比丘サンガを付嘱しない。いわんや唾を食う卑しい者においてをや」

それが今スクリーンにでていて、アーナンダやデーヴァダッタとお釈迦さまの間に交わされたことばの中に含まれるサンガです。アーナンダのことばは『涅槃経（マハー・パリニッバーナ スッタ）』に残されているもので、お釈迦さまがヴェーサーリーで80歳の誕生日を迎えられた時に重い病気にかかれますが、その時のことばです。アーナンダはサンガの行く末を心配したわけですが、このサンガは「釈尊教団」のことでしょう。

またデーヴァダッタのことばはお釈迦さまにサンガを譲れと要求したときのものです。このサンガもやっぱり「釈尊教団」のことでしょう。「仏弟子たちのサンガ」なら、デーヴァダッタはもうとっくの昔から、ヴァッジ族の若い比丘を中心とする自分のサンガを持っていたからです。しかもデーヴァダッタはみづから「仏になる」とまでいつているのですから、これは「釈尊教団」のようなものでなければなりません。もし観念的なものなら、それを「譲れ」ということばは使われないでしょう。譲れるものは物質とか組織であつて、観念は譲れません。「指導する」ということばもそうで、組織体なら指導できるけれども、観念的なものは指導できません。

このようにここで使われているサンガということばがは、「教団」を意味すると思われまふ。

そしてまた別に、「釈尊教団」が存在していなければならなかつたと考えられる状況証拠があります。

(8) 釈尊教団が存在した状況証拠

具足戒（釈尊教団のメンバーとなる任命権）

波羅夷罪（釈尊教団から追放する免職権）

それが具足戒であり、波羅夷罪です。パーリ語でいいますとウパサンパダーであり、パーラージカです。

具足戒は一人前のお坊さんとしての資格を授与することで、波羅夷罪は盗みや殺人などの重罪を犯した者からお坊さんとしての資格を剥奪することです。そしてこれらは1つ1つの「仏弟子たちのサンガ」が行います。

しかし1つ1つの「仏弟子たちのサンガ」が行うとしても、それが全世界の仏教において公認されたものでなければ意味がありません。例えば私が日本テーラワーダ仏教協会のサンガで具足戒を授けられたのに、タイのお寺に行ったら比丘として認めてもらえなかったというのでは、はなはだ困ることになります。あるいは私が波羅夷罪を犯して日本テーラワーダ仏教協会のサンガから比丘としての資格を剥奪されたのに、スリランカに行けば比丘として認められるというのでは、これもはなはだ不都合です。

このように考えると、カトリック教会のように形ははっきりとはしていないけれども、「釈尊教団」というものが存在すると考えざるを得ません。言葉を換えていえば、あるお寺で具足戒を与えることは、「釈尊教団」の一員になる資格を与えることを意味し、あるお寺で1人の比丘を波羅夷罪の処分をすることは、「釈尊教団」から追放することを意味しなければならないということです。

とはいいながら「釈尊教団」という形は見えませんが、やっぱりこれは抽象的・観念的なものだったのでしょうか。しかし私はそうは考えません。

(9) 「釈尊教団」の組織

レギュラー・チェーン店的な組織ではなく

＝イトーヨーカドー

フランチャイズ・チェーン店的な組織

＝セブンイレブン

ちょっとあまりに下世話すぎて表現が悪いのですが、それにあまりに具体的すぎてもし差し障りがあればお許しいただきたいのですが、私は「釈尊教団」はフランチャイズ・チェーン店のような組織と考えています。これに対する組織がレギュラー・チェーン店的な組織です。具体的な例を挙げるとセブンイレブンのような組織と、イトーヨーカドー的な組織ということになります。

イトーヨーカドーの店舗は全国各地にいくつもあり、私が住んでいる埼玉県の草加市にも草加店と新田店という2店舗があります。しかしイトーヨーカドーはレギュラー・チェーン店ですから、あくまでも「株式会社イトーヨーカドー」の支店で、運営の面ではかなりの部分は各地の支店に任されているとしても、最終的には資金調達やその建物・施設の設置、人材の配置、商品の購入・管理などはすべて本部の責任のもとで行われており、もちろん独立採算的な会計制度は持っているでしょうが、最終的には利益も損失も本部で一括して「決算報告書」が作成されます。したがって各地のイトーヨーカドーの店長や主立ったスタッフは、本社で採用されて各地の支店に派遣されるのですから、時々転勤があるし、支店の開設や閉鎖は本部で決定されます。最近各地のデパートが閉鎖されて話題になっておりますが、これも本社が決めることです。要するにカトリック教団はイトーヨーカドーのような組織体なのです。

しかしセブンイレブンはフランチャイズ・チェーン店でありまして、全国にあるセブンイレブンの店舗は、もともとはそれぞれが独立した小売商店です。したがって土地や店舗、設備・備品は小売店主のものであり、資金も人事も商品の購入・管理なども一切は小売店の責任のもとに行われ、利益も損失もまた小売店のものということになります。しかし加盟料（ロイヤリティ）を払って、商品はセブンイレブン系統の仕入れルートによって仕入れ、ディスプレイや商品の管理などについてのノウハウを本部であるセブンイレブン・ジャパンから提供してもらっていますので、全国どこに行っても、セブンイレブンにはあの7とローマ字のiをかたどったロゴマークの看板が掲げられています。しかしセブンイレブンはもともとは個

人商店なので、全国に散在するすべてのセブンイレブンの店舗や人材を統括管理するような組織は存在しません。

「釈尊教団」を構成する1つ1つの「仏弟子たちのサンガ」も、個人商店であるセブンイレブンのように自主的に運営されておりました。「仏弟子たちのサンガ」が持っていた権利は次のようなものです。

(10) 「仏弟子たちのサンガ」に与えられていた権利

行政

人事権

固定資産の所有権・運営権

司法

裁判権

処罰権

カトリック教団では、人事権も固定資産の所有権も、裁判権も処罰権も、すべてローマの教皇庁が握っていますが、「釈尊の教団」ではすべて「仏弟子たちのサンガ」に移譲されておりました。「釈尊教団」がフランチャイズ・チェーン店方式の緩やかな組織体であるという証拠です。

しかし立法権はお釈迦さまが握っていらっしゃいました。亡くなった時に、小さな戒は廃止してよいと遺言されましたが、仏弟子たちはどんな小さな戒も廃止せず、どんな小さな戒も制定しないでいこうと決議しましたので、お釈迦さまが定められたそのままだが現在まで伝わっています。

このように「仏弟子たちのサンガ」は、立法権を除く行政権と司法権を有する、自主的に運営される集団であったことができます。しかしながらこれらが「釈尊教団」として1つにまとまるためには、セブンイレブンの1つ1つの店舗が本部に支払うロイヤリティのようなものと、本部が1つ1つのセブンイレブンに提供するノウハウといったようなものがなければなりません。

(11) 釈尊教団を統一するもの

三宝帰依

法と律（私たちに残されたものでいえば経蔵と律蔵）

*すべての戒条は「最初の犯行者で、戒が制定されるまでは無罪」

それは言うまでもなく、三宝帰依とお釈迦さまの説かれた「法」と「律」です。「三宝帰依」は1つ1つのサンガや一人一人の修行者が本部に支払うロイヤリティであり、「法」と「律」は本部から提供されるノウハウといってよいでしょう。「法」と「律」は、現在の私たちに残されたものでいえば「経蔵」と「律蔵」に相当します。

しかしこれが単に理念に終わってしまったら組織化はできません。具体的であって、しかも実効性のあるものでなければなりません。「法」はどちらかといえばぼんやりしたものですから、そういう意味では本部から提供されるノウハウは「律」であったといってよいでしょう。「律」は違反すると罰則がある「法律」ですから、きわめて具体的なものです。

しかも「律」の条文には、どの条文にも必ず「最初の犯行者で、戒が制定されるまでは無罪」ということばがつけられています。「律」ははじめから体系的に整備されたものではなく、犯罪が行われたたびごとにお釈迦さまがそれに応じて定められたものです。ですからその条文が作られるきっかけを作った最初の犯行者は、その時点では条文がありませんから、無罪ということになるわけです。しかしいったん「殺

人を行ったものは波羅夷罪に処す」という条文が作られたら、無条件に波羅夷罪となり、罪を逃れることはできません。そんな条文があることは知らなかったという理由は通用しないわけです。要するにすべての出家修行者は昨日定められた律の条文をも含めて、すべてを知っていなければならないという前提なのです。

例えば現代の日本でも、日常的に法律や法令は改廃されています。そこで今は、国会で成立した法律は、直ちにインターネット上で公示され、誰でも知ることができるようになっていました。インターネットが発達するまでは、速やかに「官報」というものが発行されて、国民のすべてが知らなかったといわせないようなシステムになっておりました。

しかし今から2,500年前のインドでこのようなことが可能だったのでしょうか。「律の条文が定められた以後は無条件に罪である」といわれても、定められた条文を知りうる手段を持っていなければ、法律はあってもなきが如きことになって、「釈尊教団」といってもしょせん観念的なものになってしまいます。

ところが驚くべきことに、本部が提供するノウハウが全国の修行者に速やかに届けられる、そのシステムが構築されていたのです。昨日定められた法律が、今日インドの隅々にまで届くということはさすがに無理であったと思いますが、しかし去年定められた法律は、今年にはインドのすみずみにまで届いていたのではないかと思います。

(12) 釈尊教団を統一するシステム

布薩 月2回（法と）律を確認する会

雨安居 雨期の3あるいは4ヶ月合宿して法と律を深く学ぶ

自恣 雨期合宿の修了試験

遊行（諸仏の常法） 雨安居の前後にお釈迦さまに会って法と律に関する教えを受ける

そのシステムが、今スクリーンに出しました布薩と雨安居と自恣と遊行です。皆さんはテラワダ仏教のお坊さま方の日常もご覧になっているでしょうから、先刻ご承知のことと思いますが、布薩は月に2回主に律を確認する会です。もし新たに制定されたり、あるいは廃止されたりした条文があれば、この時に確認するわけです。

雨安居は雨期の3ヶ月あるいは4ヶ月の間合宿して法と律を深く学ぶ機会とってよいと思います。自恣はその最後に行われる雨期合宿の修了試験とでもいってよいでしょう。これらはすべての出家修行者は必ず行うべしと戒律で定められた義務ですから、これによって法と律はすべての修行者に徹底されることになります。

遊行は戒律で定められた義務ではありませんが、「諸仏の常法」とされています。雨安居の前後、特に雨安居明けにお釈迦さまのところに行って法と律に関する教えを受けるという習慣です。このときに新しく制定された律の情報などを仕入れるわけです。もちろん遊行の途中には各地のサンガに立ちよって情報交換します。

このように遊行も「釈尊教団」を1つに統一させるための非常に重要なシステムとして機能していたことができますが、当時の交通事情からすると、これを義務化することはできなかったでしょう。しかも全国からお坊さんが集まると、おそらく何千人、何万人になったでしょうから、これを受け入れるのは並大抵のことではありません。これも義務化することができなかった理由でしょう。

このように「釈尊教団」は緩やかな組織ではありましたが、それを統一するロイヤリティーに相当するものも、本部から提供してもらおうノウハウも、それを実現するシステムも備えていました。私たちの目に見えるのは1つ1つの「仏弟子たちのサンガ」ですが、その背後にお釈迦さまの法と律を中心

とする、全世界のすべてのサンガが網の目のようにつながりあっていたということになります。

もちろんロイヤリティである三宝帰依は、仏教徒であることの条件のアルファでありオメガであって、出家する時にこれを誓うことから始まり、集會が行われる都度にこれが唱えられるのですから、これが徹底されないはずはありません。

このように1つ1つの「仏弟子たちのサンガ」は、三宝帰依と律の規定を守るという原理と、それを実効性あらしめるシステムが有効に働くことによって「釈尊教団」は形成されていたのです。お釈迦さまの在世中は、セブンイレブン・ジャパンに相当する本部はもちろんお釈迦さまご自身でしたので、「釈尊教団」の形はまだ見えやすかったのですが、お釈迦さまが入滅されて以降は、さらにこれが見えにくくなりました。

しかしそれが具体的に姿を現した瞬間がありました。それが結集（サンギーティ）です。

(13) 「釈尊教団」が姿を現した瞬間

お釈迦さまの遺言で行われた王舎城の**第1結集**（500結集）

法と律に疑義が生じて行われたヴェーサーリーの**第2結集**（700結集）

仏教の伝統を守るために行われたアソーカ王時代の**第3結集**（1000結集）

お釈迦さまの亡くなる直前の様子を伝えた『涅槃経』は、お釈迦さまのサンガへの遺言を集めたお経といつてよいと思います。その遺言の1つに「阿難よ、あなたは師の教えは終わった、もはやわれらの師はいないと思うかも知れない。しかし阿難よ、このように見てはならない。あなたたちのために私が説き、制した「法」と「律」が、私の死後のあなたたちの師である」ということばがあります。

今も申しあげましたとおり、「釈尊教団」はお釈迦さまの説かれる法と律によって1つにまとめられていました。お釈迦さまの生存中は、何か疑問があれば本部であるお釈迦さまに確認すればそれでよかったのですが、亡くなってしまった後には確認できません。そこでお釈迦さまはこれからは「釈尊教団」の本部は自分ではなく、自分が説いた「法」と「律」だぞと遺言されたのです。摩訶迦葉はこの遺言にしたがって、お釈迦さまが亡くなってすぐに全国の有力な直弟子たちを集めて、これからの「釈尊教団」がよりどころとして行くべき「法」と「律」はこれこれであると、「釈尊教団」の権威の下にその編集を行ったのです。

しかし「釈尊教団」は緩やかな組織体であったために、この結集に参加しなかった有力な弟子ができてしまいました。それがプラーナでありまして、プラーナは一時は、「結集をしたことはよい。しかし自分は自分が釈尊の面前において受けた「法」と「律」を保持していく」と嫌みを言ったと伝えられています。

また第2結集は、仏滅後100年後にヴェーサーリーというところで、律の解釈をめぐる紛争が起こった時に開かれました。そしてそれからさらに135年くらい後に仏教の伝統に乱れが生じ、布薩が行われなくなったので、アソーカ王の時代に第3回めの結集が行われました。「釈尊教団」がよりどころとする法と律に解釈の食い違いができると、「釈尊教団」を1つにまとめることができなくなりますから、このような問題が起こった時には結集を行い、「釈尊教団」としての意思を統一をしたわけです。

ちなみに大乘仏教のお寺やお坊さんはこの「法」と「律」をよりどころとしておりませんので、「釈尊教団」の一員ではありません。また特に日本仏教のお坊さんは、「律」にしたがって具足戒を受けているわけではありませんので、釈迦仏教から言えばお坊さんでさえありません。しかし中国や韓国のお坊さんは、よりどころとする「法」は違っても「律」は同じ系統のものによって具足戒を受けていますから、「釈尊教団」の一員としては認められなくとも、お坊さんとしては認められてよいでしょう。

(14) なぜ「釈尊教団」は緩やかな組織だったのか

縁起という世界観＝絶対で唯一なるものを認めない
サンガや個人に自主性を認めた

少々余談になりますが、キリスト教が中央集権的なヒエラルヒーのきちんとした組織であったのに、仏教が非常に緩やかな組織になったのにも理由があります。キリスト教は神が絶対唯一の価値で、イエス・キリストはその預言者ですから、聖書は絶対です。したがって上意下達的な組織となり、異端が極端に廃されます。

しかし仏教の世界観の基本は縁起ですから、むしろ唯一絶対なるものを認めません。そこでサンガや個人にも自主性が認められ、個性が尊重されるわけで、このような世界観を基礎とする組織が中央集権的なものになるはずはありません。宗教裁判のようなものも起こりえないわけです。

(15) 仏教学者が描く最初期の修行者像と真実

樹下に住み――僧院において
ただ1人で遍歴し――集団の定住生活をし
糞掃衣を着て――こざっぱりした衣を着て
乞食を常とする――食堂での食事やお呼ばれもする

以上のようにお釈迦さま時代の仏教の修行者たちは、それぞれがいずれかの「仏弟子たちのサンガ」に属していると同時に、「釈尊教団」という大きな組織にも属していました。僧院が建てられたのも、布薩や自恣や雨安居を行うために必要な施設だったからでありまして、もちろん近くの園林に出て、静かに1人で瞑想することも勧められましたが、基本は僧院での集団生活でした。また旅に出ることもありましたが、それはお釈迦さまに会ったり、よき師を求めたり、情報を交換したりという目的を持った旅でありまして、一処不定の目的地を持たない遍歴ではありませんでした。原則としては一ヶ所に定住しておりました。

ところが多くの仏教学者はスクリーンに赤字で書きましたように、最初期の仏教の修行者は樹下に住み、ただ1人で遍歴し、糞掃衣を着て、乞食を常とする生活をしていたと主張しています。

しかしもしお釈迦さまの教えが、学者のいうようなものを目指していたとするなら、仏教徒たるべき最低の要件に「サンガに帰依する」ということは入ってこなかったはずで

また、そもそも樹下に住み、ただ1人で遍歴し、糞掃衣を着て、乞食を常とするというような修行方法は、お釈迦さまが捨てられた「苦行」に属します。「中道」こそ覚りに至る道であると確信されたお釈迦さまがこのような生活法を勧められるはずはありません。したがって提婆達多がこのような生活法を規定化することを提案した時に、お釈迦さまはこれを拒否されたのです。

また、もしサンガの生活が基本でなかったなら、サンガとして行うべき布薩や自恣を出家修行者が1人の漏れもなく行うべき定例行事として定められなかったでしょう。そしてもしこのような制度がなかったら「釈尊教団」というまとまりは成立しなかったはずで

仏教学者が最初期の仏教の修行者像として描くイメージは、ただ1人深山幽谷に住んで、人々とは接触しない、仙人のような独覚（縁覚）でありまして、それはお釈迦さまが目指したものではありませんでした。

そもそも仏教学者たちは、現在まで残されたパーリ語で書かれた経蔵や律蔵を信用しないという傾向があります。これらは後世の仏教徒がねつ造したもので、お釈迦さまの教えではないとでもいいたいようで

す。しかし私は布薩や雨安居や自恣や遊行は、お釈迦さまの教えを忠実に全世界の修行者に行き渡らせるための制度として定められたものであり、入滅後に行われた結集もお釈迦さまの遺言によって、お釈迦さまの教えを「釈尊教団」の心柱に据えるという意図のもとに行われたとするなら、現在に残されている聖典こそお釈迦さまの教えを忠実に伝えていると考えなければならないと思います。

(16) ゴータマ・ブッダの直弟子というべきテーラワーダ仏教

ブッダと直弟子たちの教えと生活と修行のありさま

＝テーラワーダ仏教のお坊さまを見よ

そしてこれらの聖典がお釈迦さまの教えを忠実に伝えるものであるならば、現在のテーラワーダ仏教は聖典に書かれていることを忠実に実行しているわけでありますから、テーラワーダ仏教こそお釈迦さまの教えとその修行方法をそのまま伝えている、まさしくゴータマ・ブッダ直系の仏教であるといえると思います。換言すれば、お釈迦さまやその弟子たちの教えと生活と修行のありさまを知りたいなら、テーラワーダ仏教のお坊さまを見よということになります。日本テーラワーダ仏教協会の教えに従っている皆さんは、まさしくゴータマ・ブッダの直弟子ということになります。

これからも私の「釈尊伝の研究」は続きます。スマナサーラ長老を初めてとして、日本テーラワーダ仏教協会の皆様方には、ぜひとも引き続きこの研究にご支援をたまわりたいということをお願いいたしまして、私のお話を終わらせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。